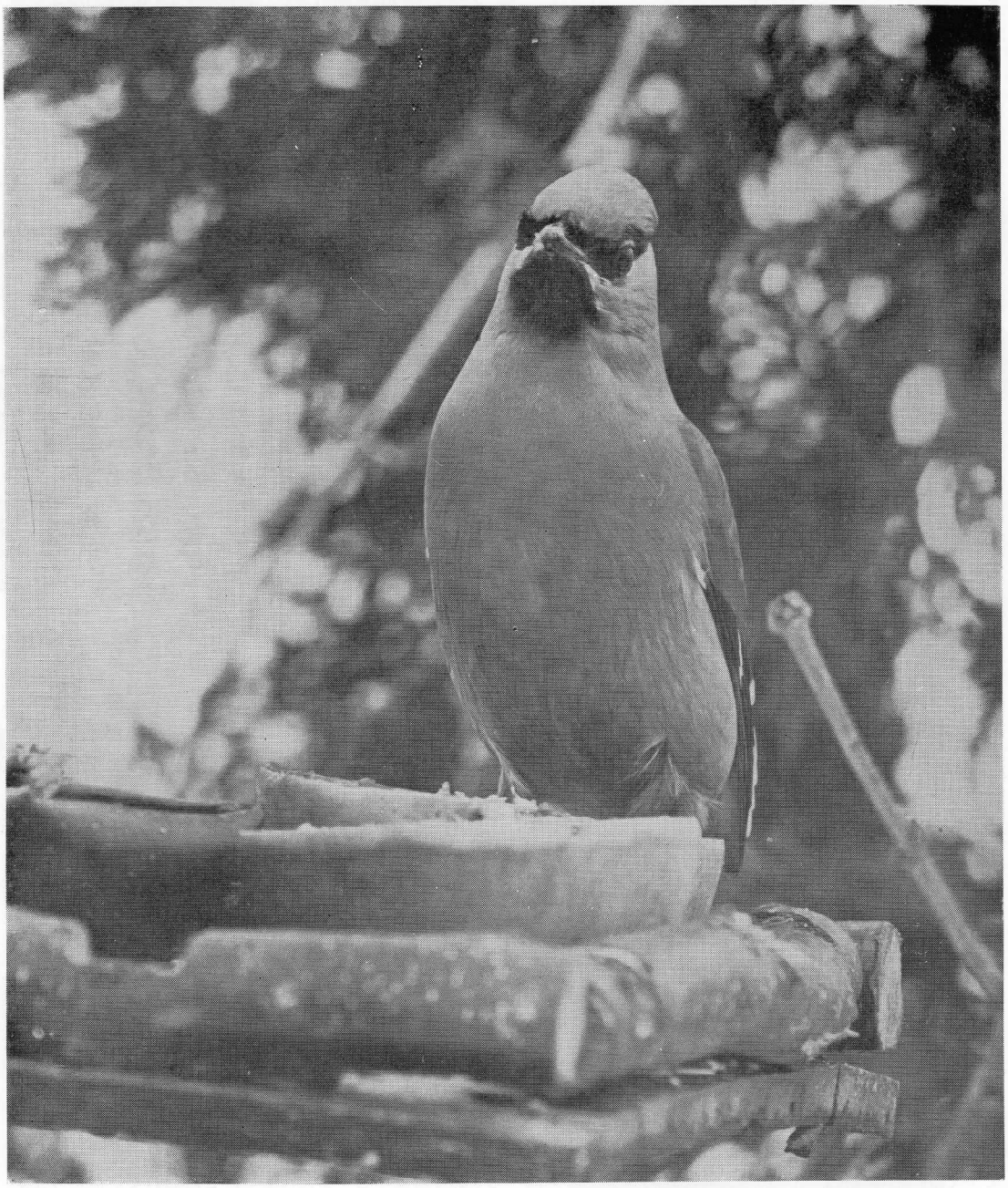
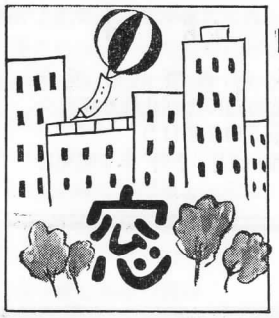
野鳥だより —北海道—

第　16　号
編集者　北海道野鳥愛護会
発行者　北海道国土緑化推進委員会
発行日　昭和48年11月
5月・8月・11月・2月 年4回発行



餌台に来たキレンジャク　昭和48年2月18日　千歳市内にて　撮影　入　江　義　智



野鳥の森と野鳥公園

■野鳥の森

環境庁が昭和47年から大雪山国立公園内の白金温泉付近に建設していた「野鳥の森」が10月に落成し、来年から一般に公開されることになった。

「野鳥の森」というのは、いわば人間と鳥との対話の場として、野鳥に親しみ、野鳥に関する知識を得ながら同時に野鳥保護思想の普及にも一役買おうというものである。昭和47年には白金のほか青森県十和田など全国3ヵ所に造成され、将来は全国に40ヵ所ほど設ける計画であるという。

白金野鳥の森は、十勝岳山麓の白金温泉の西約2キロの国有林約100ヘクタールの区域である。全域エゾマツやトドマツにダケカンバ、ナナカマド等を混じえた天然林である。標高がやや高く、全域ほぼ一様な林相をもつため、生息する鳥の種類は必ずしも多いとはいえない。しかし、区域内ではクマゲラがしばしば観察されているし、ハイタカが営巣したらしい形跡がある。また、付近の上空を飛ぶイヌワシの観察が報告されているなど、内容的にはたいへん面白いものがある。それに、種類が少ないといっても、ルリビタキ、ミソサザイなどの個体数はかなり多く、初夏には彼等の姿や囀りをじゅうぶん楽しむことができる。

野鳥の森の中心になるのは、延長約3,700メートルの探勝路である。これは森林を縫う巾1.5メートルの歩道で、一部坂道もあるがだいたいは平坦な砂利敷の道である。途中には解説板なども設けられている。建物としては、コース途中に野鳥観察舎、休憩所、展望台各1ヵ所が作られた。野鳥観察舎は木造モルタル塗約30平方メートルの建物で比較的小さな窓を持ち、裏側の草地に置いた餌台や水場に来る鳥の観察や写真撮影ができるようになっている。また展望台からは十勝連峰の山なみが正面に眺められる。

■野鳥公園

一方、北海道でも、同じような主旨から「野鳥公園」をつくることになり、昭和48年には津別町チミケップ湖畔で工事が進められている。これはチミケップ1ヵ所にとどまらず、将来はこの他にも何ヵ所かが計画されるであろう。チミケップ湖周辺は道有林で、全域が風致保安林に指定されている。ここは地区内すべてが天然林でエゾマツ等の針葉樹が多く、湖畔や沢沿いにはハルニレやヤチダモ等の広葉樹の巨木があり、自然公園ではないがすぐれた環境をもっている。森林に住む鳥のほか、湖にはアカエリカイツブリやカモ類も生息している。

野鳥公園の施設は、野鳥の森にほぼ同調した形で整備されることになっている。

■教化施設と自然保護思想

さて、鳥を観察するというごく控え目な行為がこのような形で国や自治体の〝公認〟を受けるようになったことに、やや皮肉な感慨を覚える方もあるかもしれない。しかし、それはそれとして、野鳥公園等の整備は確実に時代の流れを示すものであり、自然を保護するためにはこのような「教化施設」が必要であることはもちろんである。それは、自然をより深く知ることが自然利用の質を高め、そのことが社会の中に自然保護思想をより強く根づかせる動機になるからである。

「自然に親しむ」ことは、わが国のレクリエーション活動の中で高い割合を占めており、そのことに対する欲求も強い。それにもかかわらず、自然を管理する側からの利用者に対する働きかけは、いままであまり積極的には行なわれていなかった。そのためもあって、自然を利用するありかたはわが国の場合あまり質が高いとはいえず、それが観光地の乱開発との間に一種の悪循環を来していたともいえよう。だから、野鳥の森のような教化施設がつくられ、密度の濃い自然教育が行なわれるようになり、人々が気軽にそのような施設を利用するようになれば、それはきっと先の悪循環を断ち切る引金になると思うのである。

先号の本欄に記した観測ステーションの場合と同じように、施設ができることはシステムの第一歩が踏み出されたにすぎない。施設を管理する体制と、運営にあたる人の如何によって施設は生かされもし、殺されもする。

せっかく作られた野鳥の森や野鳥公園が、ロクに利用もされないまま朽ちてしまうことのないよう、行政面の努力が求められることは当然であるが、また利用する側にとっても、このような施設を利用するときには、やはりある程度の心がまえは必要かと思われる。他県に先がけてつくられた野鳥の森と野鳥公園がどのように運営され、利用されてゆくか、全国の注目を呼ぶことであろう。

足環のついた野鳥はいませんか？

正　富　宏　之

本誌前号でも紹介されたように、今春、浜頓別町と豊富町に鳥類観測ステーションが建てられ、活動がはじまった。〝観測〟ステーションとはいうものの、作業内容は、鳥をとらえ足環をつけて放すという、いわゆるバンディング（またはリンギング）がおもで、それ以外はまだあまり手がつけられていない。そのバンディングにしても、必ずしもスタートから軌道に乗った活動が行なわれたとはいえない。

それでも10月末現在で、浜頓別だけで64種、約1,400羽に標識がつけられ、ふたたび空へ放たれた。そのなかにはセジロタヒバリのようにまれに飛来する鳥や、標識をつけた1羽のコガモのように、クッチャロ湖から直線で北西へ約40kmの雄信内川で、はやばやと回収されたのもある。

ステーションには常駐者はおらず、標識作業は地元の人たちのお骨折りや、町当局の援助のもとに行なわれている。それぞれ勤めをもつ人が、夜明け、つまり鳥の目ざめとともに起きだして持ち場へ走り、朝食もそこそこに、こんどは各自の生活のため町へ駆けだすというぐあいである。

急の雨風にぬれながら網を片づける人、網を張るため背丈ほどもある密生したササに大鎌をふるう人、6kmも離れた町から昼休みの少しの間をみて自転車でかけつける人……などで、この調査は支えられている。

しかし、これらの〝縁の下の力作業〟も渡り鳥調査のほんの出発点にすぎない。なぜなら標識が再び回収されて、はじめて作業に意味が生じるからである。もし、鳥がどこを通って移動するかわかるなら、文字通りそこで網を張って待てばよい。が、どこでみつかるかわからないからこその標識調査でもある。もちろん、ステーションは足環のついた鳥を待ちかまえるところでもある。しかし、この広い道内にそれはわずか数ヶ所、それも限られた時間、開店しているにすぎない。

標識調査の盛んな外国でも、回収率はおおまかにいって1.5～2％という。つまり1,000羽に足環をつけて、もどるのは15～20羽である。数年前の公式報告では、日本での標識鳥数約20,000、うち回収記録の明確なのは約100羽（0.5％）である。

しかし、たった1個の足環が回収されることで、いかに貴重な情報が得られることか！標識放鳥を、闇にむかって放たれた鉄砲だまに終らせずに、光をあてて行先きを見きわめられるように、ひとりひとりの全員のご協力をぜひお願いしたい。渡り鳥調査は、われわれすべてが調査員にほかならない。

もし、足環をつけた鳥を入手されるか、それについての情報を得られたときは、次の要領でお知らせいただきたい。

Ⅰ　鳥が生きているとき

A：健康状態良好で放鳥できる

イ：次の記録をとるか、急ぎ下記へ連絡

1）足環の記号やナンバーなどすべて記録

例 [04D 環境庁 JAPAN / 01973]（できれば写真、またはリングに紙をあてて鉛筆などで写しをとる）

2）捕獲場所

3）捕獲日時

4）もしわかれば、種名、性別、年齢、冬・夏羽など

5）捕獲状況その他

6）捕獲または連絡者の名前と住所

ロ：記録をとったら鳥を放し、記録を下記へ送る

B：保護の必要なとき

イ：まず保護、傷の手当など

ロ：下記へ連絡〔または上記1)～6)の記録（写真は不要）を送る〕

Ⅱ　死んだ鳥のとき

下記へ連絡するか、鳥からはずした足環（足を切っ

標識をつけ放されたギンザンマシコ

てはずすか、標識の表面の記号を傷つけないように環を拡げてはずす）に、1)～6)のことを書いたものを添えて下記へ送る。

以上の連絡先きは

ア：各支庁の林務課自然保護係

イ：各市町村の役所・役場の林務担当の係、博物館動物園、警察関係など

ウ：本会の事務局　TEL　231—4111 内3835

エ：山階鳥類研究所　〒150 東京都渋谷区南平台町8の20　TEL　03-463-0410（標識研究室）

なにはともあれ、めんどうなことはさておき、標識のついた鳥が手にはいったら、近くの上記機関へちょっと電話をしていただくと、処置の方法を教えてくれる。その後に記録記入用紙が送られてくることもあるし、あるいは、いつどこでその鳥が放されたかも、あとで連絡がくるしくみになっている。

ぜひ多くの方の目（標識鳥の発見）と、耳（情報収集）と、ご協力を！　（専修大学北海道短大教授）

“日本白鳥の会”の設立総会に出席して

玉田　誠

札幌市に在住の松井繁氏（中央病院長）他の提唱による仮称「日本白鳥の会」の設立総会は、18都道県からの賛助者約40名が東京都四ツ谷の主婦会館に会して開催されました。この日6月24日は梅雨期にもかかわらず晴天に恵まれ、来賓・報道関係者の見守る中に午前10時5分進行担当の本田清氏（新潟県）が開会を宣言、発起人を代表して松井繁氏が会設立の必要性と主旨を説明、つづいて参会者の自己紹介を行なって会則案の審議に入りました。会名を満場一致で正式に「日本白鳥の会」とすることを決定し、「日本に渡来する白鳥を保護するため、その生態を解明し各渡来地の環境保全を図るとともに広く自然保護思想の普及と学術文化の進展に寄与する」との目的も明確にしました。役員人事は選考委員に一任し、会長家田三郎氏（新潟県）、副会長内田映氏（島根県）及び三上四郎氏（青森県）ほか監事・理事の承認を行って12時5分「日本白鳥の会」の設立をみました。

昼食後は各参会者がそれぞれの地域の実状や研究・観察の報告を行ないましたが、何分にも長年月にわたる苦心談や悩み・成果の発表なので、皆制限時間をオーバーし、北海道組4人（伊賀岩…ウトナイ湖・玉田…トーフツ湖・森下…オダイトウ・山内…クッチャロ湖——以上発表順）は懇親会に移ってからの発表になりましたが、参会者の多くは飲食の手を休めて聴いてくれました。（私は思うところがあって今回は鳥獣保護区と白鳥の保護とは何かということについてのみのべました）そして夏至を過ぎること僅かに3日というのにネオンの光がようやく目立ちはじめるころ来年6月の再会を約して南に北に袖を分ったのでした。

無報酬・善意に満ちた人々の会合というものが、これほどまでになごやかでフランクそして熱気のあるものとは考え及ばないところでありました。私の知っている人といえば僅かに数人を出ないのですが、多くの人が本人自身もかなりの遠方から参加しているのに「遠いところからよく来た、よく来てくれた」と迎えてくれたことは私たちが白鳥を迎える心そのもので感激一入のものがありました。環境庁の堀内氏や、法大・日大の講師で世界白鳥会議に日本からの参加（瓢湖の吉川繁男氏他）に尽力されたローゼ・レッサー夫人（独）も終始熱心に耳を傾け、かつ意見を述べていました。（レポートをおあげしたとき「あなたは英語を話せますか」と問われ、「極めて僅かに」としか答えられなかったのは残念でした）

すでに次期国際白鳥会議は日本で開催してほしいという要請があり、また「日本白鳥の会」に対する期待も大きなものがあると聞かされました。しかし会はやっと発足をみたばかりのヨチヨチ歩きの段階であって、多くの方々の変らぬ御指導と御援助をあおがなければなりません。《とくに兄貴分にあたる北海道野鳥愛護会及び会員の皆様の御力添えを得たいと考えている次第です。》

以上大変雑駁ですが報告に代えさせていただきます。

（1973. 6. 26.　乗船　八甲田丸船中にて）

（北浜中学校教諭）

野鳥の日記から（つづき）

さとう　実

1973年３月11日

９時35分、コウライキジ♀４羽えさ箱にくる。ほかはスズメだけ。

40分、コウライキジ♂１羽くる。♀かえる。♂もすぐ帰ったがえさ箱がからっぽかもしれない。

57分、窓からパンを投げてやったら、えさ箱のところにいたコウライキジ♂がにげないで、藪を一回りしてパンのところにきた。スズメも５、６羽。

10時04分、キレンジャク４、５羽表のえさ台にきている。コウライキジ♀（ちび）が馳けてパンのところにくる。♂は一寸前藪へ戻った。えさ箱の中にツグミ♀１羽がいる。いくらか餌残っているか。

07分キジ♀２羽となる。

10分キジ♂１羽もくる。新顔らしい。ヒヨドリ３もパンにくる。

30分近所の松倉さんがうちの野鳥を見にきてくれたが生憎何もきていない。

12時40分、表のえさ台にキレンジャク７、８くる。

２時48分、カケス１、ヒヨドリ５、スズメ少しだけいる。

50分、ハイタカくる。ヒヨドリ１、高い枝でピーピーないているとおもったら、ハイタカに追われた。50メートルほど追ってハイタカはもとの枝の近くに戻り、間もなく水道局の公宅の屋根を越えて飛んでいった。あとをみると、カケスはもといた枝から下の茂った枝に移っている。

３時10分、窓からパンを投げる。一番先にハシブトガラ、そのつぎにスズメ、キジ♂２。ヒヨドリ３、カケス３いる。３号のえさ台の脂と、物干柱の脂に。アカゲラ♂は５号の脂に。

53分、窓のえさ台にゴジュウカラ１。

58分、ハイタカがヒヨドリを追って窓の近くまできてすぐ林の奥の方へ飛んでいった。アカゲラ♂が柱の脂の反対側にピッタリくっついていて動かない。ハイタカに用心したのだ。

３月12日

７時55分、投げたパンにキジ♀５きている。しばらくして♂も３きたが３羽揃ったのはしばらくぶりだ。

12時23分、向いの家のテレビアンテナにハイタカきてとまる。間もなく飛んでいった。30分ばかりして、キレンジャク20ばかりそのアンテナにとまる。

３月13日　朝

キレンジャク５、ヤマゲラ脂をつついて40分もいる。ヒヨドリ８、アカゲラ♂１、シジュウカラ、カケス５、キジ♀５雪の上のパンにくる。ツグミ♂１、アカゲラ飛ぶのをみたが♂♀不明。

11時10分、キレンジャク20ほど表のえさ台に群がる。こういう時はえさ台を二つにしてやりたいとおもう。

58分、家の前の電線にキレンジャク40ばかりならんでいる。

午後、ヒヨドリ１、シジュウカラ、ヤマゲラ♂１、スズメ１、キレンジャクが家のえさに一杯きて、パンとリンゴがあるのにパンをたべている。ヒヨドリがきたら２羽残ってあとは電線に逃げた。間もなく電線の連中がパーッと降りてきたら、こんどはヒヨドリがにげた。ゴジュウカラはじめてくる。キジ♀４、アカゲラ♂１が２号の脂に。表の電線にキレンジャク60ばかりと向いのアンテナに６、７。そろそろ渡るので集っているのだろうか。

５時15分、窓のえさ台にキレンジャク一杯。まだねぐらへ帰らないのだ。

36分、風呂から出てみると、窓の台にキレンジャク１だけいる。いつもこの台に１羽だけできている、それかもしれない。仲間はずれなのだろうか。

３月14日　朝

雪降っている。スズメ20ほど、ヒヨドリ11、ムクドリ２、シメ１、キレンジャク１（きのうおそくまでいた奴か）。表のえさ台の脂にゴジュウカラ１、アカゲラ♀１、シジュウカラ２、カケス２、ツグミ♀１、表の電線にキレンジャク80ばかり。雪かきをおえて家の裏をみたらシジュウカラ、ハシブトガラ３つ位ずつせわしくとび回っている。

10時28分、ハイタカきて、台所の前の木のてっぺんにとまる。この木の繁みの中にカケス１とスズメ20ばかりいる。シジュウカラとハシブトガラ６、７がえさ台の脂にとび回っている。ヒヨドリが３、４周囲の枝にいてピーピーなく。中にはハイタカの正面の枝にきているのもいる。警戒して鳴くのだろうけど、からかっているようにもみえる。ハイタカは鳥のうごきにつれて首を回してその方をにらむが、その首は背中まで回る。どう動くかと丁度一時間みていたが、とうとう動かず根負けしてやめた。

11時42分、ハイタカはまだそのままで、その木にスズメは皆いなくなって、カケスだけ残っている。ゴジュウ

カラ1とシジュウカラ、ハシブトガラが10ばかりとび回っている。

48分、表の電線にキレンジャク40ほどいる。

50分、ハイタカがまだいるのに、カケスは柱の脂をつついている。アカゲラもきて1号の脂をつつく。

58分、ハイタカ木にとまったままで羽を扇のようにひろげた。

12時12分、表のえさ台にキレンジャク一杯に降りる。

2時30分、キジ♂2えさ箱にくる。少し経って♀2もくる。

3時50分、表のえさ台の脂にゴジュウカラきてつついている。

野鳥雑記 ― 俳句の嘘 ―

新　妻　　博

さとう実さんから、シマエナガが7羽きました。可愛いい小鳥ですね、とTELがあってから間もなく、こんどは羽田恭子さんから、野幌にまた出かけましたが一昨日あれだけいたツグミが1羽もいないのです、とお便りがあった。10月も半ばをすぎると野鳥便りがひんぱんになる。ことしはナナカマドの実が昨年にも増して大豊作、枝が折れそうなくらいだからツグミもキレンジャクもたくさん来てくれるだろう。

ボクが野鳥便りを交換しているのは、このほかに東京には会員の畠中妙子さんがいるし、函館にもひとりの俳句つくりの友人がいて連絡してくれる。イスカやベニヒワが大挙して来襲したときなどボクはすぐ電話器をとって、2、3日中にそちらに行くでしょうと伝令をとばす。すると数日していま来たとか、昨日何羽見たとか、ヘンなのが1羽混じっているなどと返信がくる。東京からはこの冬はジョウビタキの♂が庭にテリトリイを定めたと報告がある。ことしもそういう季節がめぐってきた。

この秋は、例年になくいい条件がそろってボクの周辺の紅葉は旬日余に亘って目を楽しませた。真駒内川に沿った山手のモミジは殊のほか見事で、錦繡の名にふさわしい美しい眺めだった。

せきれいのつと小走りに紅葉谷

ここのセキレイは例年ハクセキレイで、ことしはセグロセキレイも2羽あらわれた。ハクセキレイは渡来時には10羽あまりを数えたがまもなくカップルに分れて2つがいが営巣したようである。大むね俳句は野鳥の名に忠実ではなく、なるべく簡単に片付けてしまうのは音数に制限があるからである。この句の場合、ハクセキレイのつと小走りに……という具合にまいらぬのは残念である。それにしても「紅葉谷」はあまりいい出来ではないようだ。実際には谷といえる程でないので何となく気がひける。それに紅葉谷といえば夕張線の国鉄駅名そっくり、これもまた気に掛る。

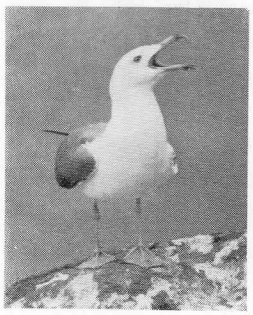
6月3日、北大の小川さんの野鳥調査に加わって、篠路原野をモエレ沼まで歩いた。原野があり、川があり、牧草地があり田があった。したがってオオヨシキリが啼きコヨシキリがかしましく、カッコウは翔び、シマアオジもノゴマも出てオオジュリンの営巣もあった。ボクたちが日盛りの中でだいぶ疲れたころ、田の岸からとつぜん中型の鳥がとび出し水平に翔って、すぐ先の田の中に姿を沈めた。大方はゴイサギの仲間だ、ヨシゴイの♂だろうという処に落ちついた。まだこういう奴がこんな所にかくれていたわけだ。

夜を啼く五位や田の神素足なり

この句はフイクションで、心象風景である。「五位」だけで、これをゴイサギとするのは少し無理があるが、昔、さる方から正五位を贈られたという故事を尊重してこれでゆるして貰おう「夜を啼く…」でゴイはゴイサギという想定はできるはずである。「田の神素足なり」はまったくのつくりごとであるが、民話風の味を生かしたつもり。この句は「田の神」ではなくて、うちの「山の神」ではないかと感ぐる人もあるが、そこのところは読者諸兄におまかせして置く。

海鵜また西日をよぎるひとりの旅

この句にもウソがある。9月中旬、妻の学友が川崎市から訪れた。サッポロではうまいものは食えないとの判断から、小樽へ汽車で行った。鮨らしい鮨を賞味しようというのである。だからこれは、まかりまちがってもゼッタイに「ひとりの旅」であるわけがない。しかし、ここは何としても独り旅でなくてはおさまらないのだ。「海鵜」すなわちウミウではない。ここでは「海の鵜」であって、あるいは海辺でみたウミウの意味にもなる。そういうことにして頂きたいのだ。歳時記には「夏の部」に「鵜」に出ており、「鵜にはウミウ、ヒメウ、カワウの種類があり云々」である。なにかひとつ脱落してはいないか。チシマウガラスはどうだ。ともかくこれは海の鵜で車窓の風光である。ちなみに「西日」も夏の季語で、この作品、すこしウルサクはないかというのが自解、いや自戒である。



ウ　ミ　ネ　コ

天売島海鳥観察記

小山政弘（文）・入江義智（写真）

去る７月25日～28日の４日間、私たちは天売島および焼尻島で海鳥を中心とする野鳥の観察をした。周囲10kmたらずの小島とはいえ、私たちにとっては初上陸の島であるから、十分な観察はできなかったが、フィールドノートをもとに、今回の観察記録をまとめてみる。

７月25日：天売島行き連絡船が羽幌港を出て約15分後、やや荒れぎみの海面をウミネコ、オオセグロカモメの群に混って、ミズナギドリ科の一群が目に入ったが、種名はわからない。船上で知りあった、福岡野鳥の会の高校生４人は、早速、私たちと打ちとけて野鳥情報の交換に忙がしい。

羽幌港を出て30分後、焼尻島との中間位置にさしかかると、ウミガラス、ウトウの姿が見えだした。図鑑、写真やハク製で見るのと、実物を観察するのとでは、多くの場合印象を異にするものだが、ウミガラスはやはりウミガラスに見えるし、ウトウは嘴の突起が双眼鏡なしでもよく観察できた。

船酔いに悩まされながら、海面を這うように飛んでいくウミウを追っていると、ウトウよりは、ひとまわり小さい鳥が、数羽の群で飛んでいく。翼は細めで、全身黒っぽいが、皆目見当がつかない。ウミツバメの仲間だろうか、などと話しながらその鳥を見送った。

焼尻島を経て、天売島に到着したのは午後１時。港付近で、ハクセキレイの給餌行動を観察した。道路わきの土砂崩防護堤のすぐ上に巣がある。餌をくわえ、こちらを警戒する親鳥を写真に納めるために、入江がカメラを構える一方で、小山は、目の前でのんびりと翼を休めるウミネコと上空を飛びかうアマツバメを観察した。

マムシが出没すると土地の人に警告を受けた、島南岸のキャンプ場までの行程は、予想以上に苦しかった。同行の高校生が一人、強い船酔いに痛めつけられ、彼の荷物が私たちにふり分けられるはめになったからである。

その夜のキャンプは、折りからの水不足とマムシへの恐怖と天候への不安とが、私たちを悩ませたが、海鳥繁殖地観察を明朝に控えて、胸は期待に満ちていた。夕刻から、ねぐらに移動するウミネコの群を観察していたが午後８時頃、ようやく鳴声が遠ざかって聴こえなくなった。

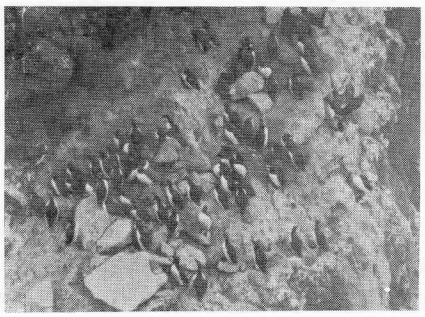
７月26日：朝から天候がすぐれない。岬の方は霧でまるきり見えないのだ。それでも、午前中はキャンプ場から徒歩20分で着く通称「ケント鴨燈台」付近の海鳥観察展望台で鳥を観察した。ウトウのことを、この地では「ケント鴨」と通称している。この燈台付近一帯は、ウトウのねぐらの穴だらけで、岬展望台に通じる歩道も、この巣の群のただ中を横切る格好となっている。

岬に出ると、ケイマフリは、すでに繁殖の後期で、もう巣立ちをして飛びまわっている幼鳥の姿が、成鳥の中に見られた。

この鳥の名はアイヌ語の「ケマ（脚）・フレ(赤)」が訛ったものだが、愛らしいその姿は、実に私たちを感動させてくれた。

およそ80ｍの岬から見下ろすと、「赤岩」と呼ばれる岩礁があり、80羽ほどのウミガラスが、翼を休ませていて、時折、カララ……と一斉に鳴き騒いでいる。観光絵はがきの写真にもなって見馴れた光景だが、その鳴き声を聴きながら「オロロン鳥」など名前をつけた人の身勝手さに呆れかえって、私たちは苦笑してしまった。

ウミネコが、人間防護サク（？）の２、３ｍそばでテリトリー争奪戦を見せる。褐色の幼鳥が親鳥に給餌をねだる。入江は夢中になってシャッターを切りはじめた。



赤岩のウミガラスの群

午後、天候がやや回復してきたので、私たちは海岸づたいに岬の下に出ることにした。

大丸石が敷きつめられた海岸は歩きにくい。途中、私たちはしばしばウミネコの死骸に出くわした。すでに朽ちはてて白骨化したもの、死後間もないもの、体内にウジがうごめいているもの、など様々だ。幼鳥の死骸がかなり多い。ウミネコだけではなかった。まだ生毛がはえているウミガラスのヒナも死んでいる。頭がもがれて、傷口が血で汚れているところを見れば、昨日か今朝の死骸だろう。ウミネコかカラスにでも殺されたのかも知れ

ウトウの死骸

ない。入江は、ひんぱんに出くわす鳥の死骸に顔を曇らせながら、そのなきがらをフィルムに納めていた。

ふと、10m先の岩に、見馴れぬ鳥を発見した。ムクドリ大で、全身地味な黒褐色地に不明瞭な斑紋がある。尾を上下させるものだから、入江が、うっかり「セキレイ科だろう」などと口走った。まもなく、別の岩にもう一羽がとまった。頭から胸にかけて、濁ったルリ色だ。これでわかった。イソヒヨドリのつがいで、最初みたのは♀の方だったわけだ。初めて見るイソヒヨドリは、粗末でやや貧弱な印象であった。

難破した漁船の残骸が岬の下に打ち上げられていて、付近一帯はウミネコの糞でまっ白に汚れている。岩かげには、翼を痛めたウミネコの成鳥と、すっかりふくれ上がった幼鳥とが私たちを恐れていた。彼等が死ぬのは、今晩だろうか、明朝だろうか。

私たちは、あまりにも厳しい自然の摂理を目の前にして、岩壁と頭上を被うような多くのウミネコにすらいいしれぬ不安と恐怖を覚え、早々に引き返すことにした。

7月27日：昨夜の見事な星空に晴天を期待していたが、朝曇りは岬の方まで続いていた。

急いで朝食を済ませ、昨日の展望台に出発した。昨日よりは、海鳥の数が少ないが、相対的にケイマフリの数は多い。

午前7時、今まで岬をスッポリ包んでいた霧が、みるみる消えていく。空は青く、海は紺碧だ。朝といっても真夏の晴天下は日ざしが強い。鳥たちは、岩壁で翼を休めはじめた。ケイマフリが、6m先の岩にとまった。カメラを向けると盛んに鳴きわめく。

およそ20分間というもの、観光客の姿はなく、私たち二人っきりと、ケイマフリ、ウミネコ、ウミガラスの天国であった。

明るい朝の光の中を、海から飛び帰っては岩で休み、休んでは再び飛び発つ愛らしいケイマフリの姿は、一生忘れないだろう。私たちは、ひとしきり、夢中で写真を撮り終えた後、顔を見合わせて「来てよかったナー」と目で合図した。

午後私たちは天売島を発ち、焼尻島に上陸した。以前野村梧郎さんから、是非ともこの島の自然林を見てきなさいと助言されていたからである。

7月28日：旅館の自転車を借りて、朝から焼尻島めぐりをした。炎天下、旅の疲れが出はじめた入江は、ペダルを踏むのも苦しそうだが、見事に保存されている島内のイチイ自生林の中はひんやりと静かで涼しかった。遠くで、クロツグミの声がした。どこか場違いの感じだったが、これだけの林があれば、生息していても不思議ではない。

焼尻から羽幌までの船旅は、既に海鳥を見馴れた私たちにとって楽しい観察の時間であった。途中、海面に浮いているホンダワラの実をついばむアカエリヒレアシシギの小群に幾度も出会った。何れも冬羽に似た幼鳥で、はじめは別のシギではないかと迷ったほどである。

今回の観察行で確認された野鳥を表にしてみたので参考までに示す。（＋）の数は増す順に、多い、かなり多いの意味を示している。

天売島・焼尻島の野鳥　　（1973．7）

種　　名	天売島	焼尻島
1．ハシブトガラス	＋	＋
2．ムクドリ	＋＋(渡り群)	－
3．スズメ	＋	＋
4．カワラヒワ	＋	＋
5．ハクセキレイ	＋	＋
6．ウグイス	＋	＋
7．ノビタキ	－	＋
8．ノゴマ	＋	－
9．クロツグミ	－	＋（声）
10．コウライキジ	＋	－
11．イソヒヨドリ	＋	－
12．キジバト	＋	＋
13．アカエリヒレアシシギ	－	＋＋（海上）
14．ウミネコ	＋＋＋	＋＋（海上）
15．オオセグロカモメ	＋	＋
16．ケイマフリ	＋＋	－
17．ウミガラス	＋＋	＋（海上）
18．ウトウ	＋＋＋	＋＋（海上）
19．ヒバリ	－	＋
20．ウミウ	＋＋	＋（海上）
21．ヒメウ	＋	－
22．ミズナキドリ　ＳＰ	－	＋＋（海上）
23．アマツバメ	＋＋	＋
24．カモメ	＋	－

冬季に増毛地方でみられる鳥

高　橋　明　雄

§1　樹園地の周辺でみられるもの

北緯43度51分に位置する増毛地方は、果樹栽培の経済的北限とみなすことができる。暑寒沢に100ha余、別苅ニナイベツ川畔に40ha余……と点在し、リンゴ・ナシ・サクランボなどを生産している。

冬の鳥の中には果樹園周辺をすみかにしているものも多く、地面に落ちた果樹が腐って餌になることもある。ヒヨドリは腐果で旺盛な食欲を満し、キレンジャク・ヒレンジャクの混合群も、まけずにこれを啄む。

秋に落ちたリンゴは、降雪で一度は姿を消すが、融雪と共に再び現れて野鳥の食物源になる。彼等の餌は他にもあり、例えば暑寒別川畔に多いヤドリギなどもそれらしい。

落葉松の防風林や近隣の林にはカラ類・エナガが賑やかであるが、シジュウカラとコガラは混っており、15羽前後の群が普通である。

農民が嫌うのは1月中旬頃に襲来するウソの群で、ウメ・スイミツなどの芽を順に食べるが、リンゴは一番あとまわしになる。彼等は大群をなして各地の樹園地を移動し、被害もおびただしいが、1972年冬は全く姿をみせなかった。

夏にサクランボを食べて被害甚大なムクドリは、少数残留して越冬するものとみられ、2月6日に6羽を目撃している。

山が近いのでアカゲラも飛来するが、比較的老木に集まる傾向をもつ。

友人・仙道弘視君は1月27日にシメを1羽発見しているが、残留しているのだろうか？

また、12月末にハクセキレイをみることもあり、少数の個体が越冬することを予測させる。むしろ樹園地よりも海岸の無積雪地や民家近くへ移っているのだろうと推察するが、今後の課題である。

以下、冬季にみられる鳥を列記する。

キレンジャク、ヒレンジャク、エナガ、シジュウカラ、コガラ、ゴジュウガラ、ヒガラ、ハシブトガラ、コゲラ、カワガラス、ミソサザイ、ヤマゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ウソ、カケス、ハシブトガラス、ハシボソガラス、トビ、ヒヨドリ、カシラダカ、スズメ、ムクドリ、シメ、ハクセキレイ　25種

ただし、上記は12月末から3月下旬までにメモした一般的なもののみである。

§2　珍らしくやってくる鳥

増毛地方に繁殖することはないが、季節的に短期間のみ目撃する鳥もある。ほとんど渡りの途中で群から離脱したもの、怪我による不時着であろう。次にその記録を若干とりあげておく。

i) オオワシ

1969年1月29日の朝、吹雪の歩古丹海岸で松本五三郎氏が翼を打って死亡、カラスが寄りはじめているオオワシを1羽発見した。これは冬季のみシベリア方面から、海岸線をたどって南下するものらしく、以前にも死体を拾った人があり、舎熊方面では飛翔を見た者もいる。たびたび季節的に漂行してくるのであろう。

ii) オオハクチョウ

1972年1月29日の早朝、信砂川にオオハクチョウが1羽だけ降りてきた。3日後に飛び去ったが、暖冬のために早くも、シベリアへ移動を開始した群のうち、脱落した個体だろうという見方が強い。

iii) マガン

1969年4月3日、暑寒別川畔の増毛高校グランド付近で、マガンを1羽発見した。

近所の人の話では、3月28日頃からいたそうで、30m地点まで近寄っても逃げない。右足に怪我しているらしく、だらりと下げて片足で立ち、飛翔力も弱かった。

堤の辺に雪の消えたところがあり、少し草が見えるので、これを食物にしていたらしいのだが、大雪が降った5日の朝には、もう姿を消して再びもどってはこなかった。

渡りの途中で負傷し、群から脱落したものであろう。

iv) ハシビロガモ

1969年4月7日、暑寒別川上流8kmの地点で、2羽のハシビロガモを発見した。

これは冬鳥としての渡り途中と考えられるが、ひょっとしたら生息していたのではないかという気もした。2羽がオスとメスだったこと、北海道でも少数は繁殖すると聞くからである。しかし確認していないので明言はできない。

（増毛町在住）

愛山渓探鳥会に参加して

中　内　みどり

野鳥愛護会に入会して２年目、１年目はただ皆さんといっしょに歩きまわっているだけで、説明をきいては、へェーなどと感心していただけですが、今年になってやっと、はっきりとした特徴のある鳥だけ何種類かおぼえられたので、毎回の探鳥会が楽しみでした。

今回の愛山渓行きも（健脚向きというのが少々不安でしたが）とても楽しみにしていました。７月14日はあいにくの小雨もよう。きくところによると１昨年の愛山渓行きのときも、悪天候のため、途中でひき返したという因縁つき、今回もかえりうちになるのでは、と心配しながらミーティング、雨音をききながら就寝。

15日朝２時ごろ、アカハラの大きな声で目がさめる。どうやら晴れているよう。５時30分ヒュッテ出発、昇天の滝まで渓谷ぞいに歩く。途中、ウグイス、コマドリ、ミソサザイがさかんに歌うが姿が見えないので木々をうらめしげに見上げながら、ゆっくりと歩む。

最初にコサメビタキ、サメビタキに出会う。２種ともじみな色相だけど大きな黒目がちの眼がとてもかわいらしい。しばらく歩いたところで、後方からクロジが出たの声で、それっと走りもどるといる。離れた枯木の先にちょこんととまって！　藤巻さんの説明では、低地でめったにみられない鳥という。非常に幸運だったと思う。また沼の平付近で遠くの岩の上にいるノゴマ(♂)を見つけた。遠い。私達の気持を察したみたいにノゴマが飛んで、少し手前にとまってくれたので、今度はまわりの緑の中にノゴマの真赤なのどが鮮かに見えた。

沼の平からはくだり、野鳥のさえずりをききながら、ヒュッテにもどる。ミーティングでのミユビゲラを期待していたのが出なかったことと、井上先生がぎっくり腰でヒュッテに居残りになられたことは、残念でした。今回の探鳥会は、コースも滝あり、湿原、雪渓ありで変化にとみ野鳥も24種のほか、植物までおぼえることができ、たいへん楽しかった。次回が楽しみです。（美唄市在住）

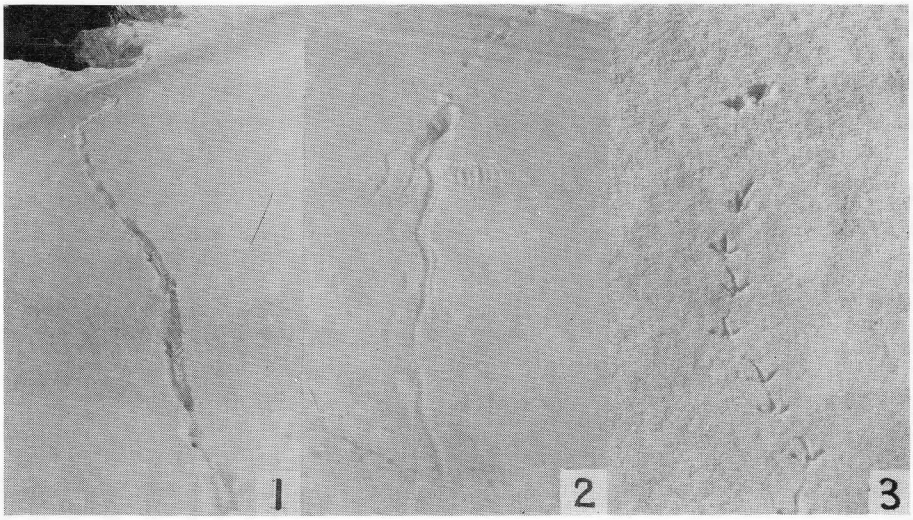
◇この日の記録：カモの一種（種不明、松仙園で）、キジバト、カッコウ、ツツドリ、キセキレイ、モズ、カワガラス、ミソサザイ、カヤクグリ、コマドリ、ノゴマ、ルリビタキ、アカハラ、ウグイス、エゾムシクイ、キクイタダキ、サメビタキ、コサメビタキ、シジュウカラ、アオジ、クロジ、マヒワ、イスカ(?)、ウソ、ホシガラス。このほか出発前にハリオアマツバメ、マミジロ。

クイズ

出題
藤巻裕蔵

雪のつもった畑や野原は白いノート。そこに動物たちはいろいろのことを書きしるします。これを解読する辞書はありません。でも注意深く観察すれば、書いてあることをきっと読みとることができるでしょう。

写真１―３は、キジ（コウライキジ）の跡ですが、それぞれちがいます。この写真をみて、キジがどのような行動をしたかわかりますか。答は12ページにあります。



鳥の保護の本

日本の野鳥

小笠原　昺　著

秋田大学の助教授である著者が、自分の研究や外国の報告などを紹介しながら鳥について語っている、科学随筆というような本です。

第1章（自然と鳥）では、東北大学で調べたカラ類の群の行動の紹介をはじめ、野山や水辺の鳥たちの生活が書かれています。第2章（人と鳥）では、都市化や観光開発が鳥にどんな影響を与えたかが、各地の実例によって語られ、また飼鳥の野生化の問題などにも触れています。第3章（滅びゆく野鳥）では、シラコバト・トキ・ツルのような鳥と生息地の状況が、第4章（野鳥保護の考え方）では鳥獣保護区や鳥獣保護事業など、主に行政的な制度や狩猟に対する著者の意見が述べられています。

開発が急速に進み、鳥の生息場所がどんどん失われる今日の日本では、研究者もただ鳥を研究していればよいという時代ではないのでしょう。著者が一番言いたかったことは、鳥と、鳥が住める環境を守ることのたいせつさであるように思われます。この本の意見の全てには賛成できない人もあるかもしれませんが、実際の研究を踏まえて書かれた、視点のしっかりした好著といえましょう。　（毎日新聞社刊　750円）

ロビンの生活（世界動物記シリーズ1）

D．ラック著　浦本昌紀 他 訳

ロビンというのは日本のコマドリによく似た鳥でヨーロッパ、とくにイギリスではたいへん人々に親しまれているようです。人なつこい鳥ですが闘争性は強く、ほとんど一年中なわばりを定めて生活しているようです。

D．ラックはイギリスの有名な鳥学者で、ガラパゴスのダーウィンヒワの研究などで有名ですが、この本も一般向きのものとしては代表作のひとつで、原文はペリカンブックスにも入っています。ラックが20代のとき、学校の教師を勤めながら行なったロビンの研究の成果をまとめたもので、囀り、コートシップ、なわばり、巣作りから育雛など、ロビンの生活がくわしく書かれており、近代動物行動学の古典のひとつに数えらています。

私たちが鳥をみるときには、ほとんどがあれは何という鳥だ、だけで終ってしまいます。しかし、あの鳥は何かがわかったところから本当の観察がはじまるということを、この本は教えてくれます。若い人たちで野鳥について研究しようとする人はもちろん、もう一歩深く鳥の生活を知りたいという人にも、必ず読むべき本として推せんいたします。（思索社刊 1,200円）

双眼鏡の雨よけについて

松　岡　　茂

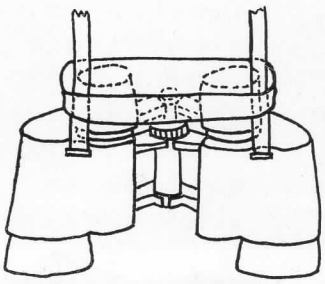
鳥をみることを楽しみにしている私たちにとって、雨や雪はいやなものの一つです。探鳥に出かけたものの、初め晴れていた空ににわかに雲が走り、雨がぽつぽつ落ちてきました。サァ、双眼鏡の接眼部を手でおさえたりヤッケのポケットにしまったり、雨がっぱの中に入れたりで、ともかく探鳥続行、前方に鳥が現われたので急いで双眼鏡を取り出し眼にあてましたが、レンズが曇っていて何もみえず！　そうこうするうちに鳥はどこかへ。ほんとにいまいましい雨！　こういう経験をなさったことはありませんか。そこで去年北海道へ鳥をみに来られたドイツのティーデ博士が双眼鏡に'雨よけ'なるものをつけていましたのでここに紹介しましょう。

1図を示したように、接眼部全体をカバーする皮ケースに肩ひもを通してあるという実に簡単なものです。使用時はケースを上にあげてみるのですが、肩ひもにかなりのたわみができるのでそれほど上の方にずらす必要はないようです。

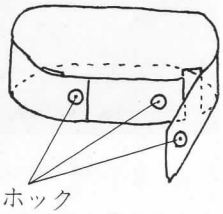
ティーデ氏は晴天の日もほこりよけにつけていましたが、2図のような肩ひもを通す部分をホックかマジックテープにすれば、雨や雪のときにだけそれをすばやくつけるということもできるでしょう。

そこでお願いですが、このような皮細工のできる会員の方がいらっしゃいましたなら、数多くつくって、会員に実費程度でわけて下さいませんでしょうか。私のように細工ができない人も数多くいらっしゃると思いますので。　（北大農学部大学院）

◁1図



▽2図



ホック

■井上副会長に北海道文化賞

先日のニュースでお知らせしたとおり、井上元則副会長が昭和48年度北海道文化賞を受賞され、11月3日札幌で受賞式が行なわれました。長年にわたり社会教育に尽された功績によるものです。

お祝い申しあげるとともに、今後ますますご活躍されることをお祈りします。

■日ソ渡り鳥条約調印

かねて日ソ両国政府の間で交渉がすすめられていた日ソ渡り鳥条約がまとまり、田中首相訪ソの際、10月10日にモスクワで調印されました。

条約の内容は昨年の日米渡り鳥条約とほぼ同じで両国間に共通に生息する鳥類とその環境の保護、稀少鳥類の輸出入の規制などを骨子とするものです。条約の対象となる鳥類は別表にあげられていますが、種類数は287に及んでおり、日米の189を大きく上回っています。

この条約は国会で批准されたあと、両国間で批准書を交換することによって発効しますが、地理的にもソ連に近く、ソ連から日本に来る渡り鳥の大半が通過する北海道にとっては、この条約は日米条約以上に意義の大きいことといえましょう。

■鳥獣保護実績発表大会に浦河一中特殊学級が参加

環境庁と日本鳥類保護連盟が主催して毎年行なわれている鳥獣保護実績発表大会が、今年も11月26日に環境庁でひらかれ、北海道からは日高管内の浦河町立第一中学校特殊学級が選ばれて参加しました。

同学級は情操教育の一環として野鳥保護をとりあげ、毎年たくさんの巣箱を作って町の公園などに架けたりして、人々から喜ばれています。

発表大会には生徒2名のほか担任の吾田先生が出席し山階芳麿博士その他大勢の人々の前でこれまでの苦労や成果を発表しました。

今月の表紙　キレンジャク

札幌ではレンジャクにリンゴなどをサービスする人がだいぶ多くなってきたようです。キレンジャクとヒレンジャクの2種がありますが、尾の先の赤いヒレンジャクは北海道ではあまりみられないようです。

クイズの答　（問題は10ページ）

1. 新雪をこいで歩いた跡です。尾をひきずらないようになめ上にあげ、胸をはってゆっくり歩く姿が目にうかびます。
2. 手前の方からとびおりた跡です。まず着陸準備のため脚をのばしました。しばらく雪の上で足をひきずって着陸。おりたとたん開いた翼を雪面につけ、それから歩きました。
3. 歩いてきて飛び立ったところです。このとき、力がはいるのでしょうか。普通に歩いているとちがい、足は雪の中に深くしずみます。

＜事務局だより＞

☆ 中東で戦争があったら、急に石油が不足してきました。今度のは戦争が原因の政治的な危機であるとしても、人類はいま、地球が数億年の時をかけてつくりだした有限な資源を徐々に食いつぶしていることは間違いありません。そして、将来を考えずに目先の繁栄を追っている人類に対する警告が、科学者の間からしきりに発せられるのが、ここ数年めだっています。

☆ 今年カール・フォン・フリッシュやニコ・ティンバーゲンと共にノーベル医学・生理学賞を受けたコンラート・ローレンツもその一人です。彼は動物行動学の父と仰がれ、数々の業績をあげていますが、本誌第8号で紹介した「ソロモンの指輪」（早川書房）を読めばわかるように、おそらく世界中で動物のことを最も深く知り、また愛している人といえましょう。

☆ 最近のローレンツは、人間の行動に隠された本能的な衝動に、動物行動学の立場からとり組もうとしているようです（人類八つの大罪―思索社―など）。一方、大江健三郎氏はこのことを評価しつつも、それが人間の管理強化の道へつながることを危ぶんでいます（11月6日付け朝日新聞）。まだ元気なローレンツが、これから先どのように思想を深めてゆくかを期待して、今回の受賞を祝いたいと思います。

☆ 雪がおそいといわれていましたが、降りはじめたら一度につもったようです。昨秋あれほど多かったベニヒワもイスカも、どうしたのか今年はさっぱりニュースが入って来ません。やっとキレンジャクだけが、ぼつぼつ姿を見せてきたようです。でもこの冬も寒さは厳しそうですから、この号が出るころにはうれしいたよりが聞かれるかもしれません。

☆ 17号は原稿〆切りを1月15日、発行を2月中旬といたします。どうぞたくさんの原稿をお寄せください。送り先は〒060札幌市中央区北3西6　道庁自然保護課内本会事務局です。